

## 日独合同授業

第15回日本語教育連絡会議

主催 ダーラム大学東洋学部

Bischof-大久保幸子

マンハイム大学経営学部副専攻日本学につきましては別項で詳細を報告していますので、このテーマに入る前に、これと関連させ現況を簡単に述べさせていただきますと思います。

学生数は年一度冬学期の受け入れで、現在、基礎課程が13名、専門課程で約18名、全員で31名となっております。志願者15～20名弱に対し受け入れが8、10名ほどですが、多くの場合、1、2学期内に2～3名は転校、転籍する人ができます。経営学との両立困難が多くの場合原因だと思いますが、副専攻として基礎課程で日本語にかかる時間が学期、週時間10時間から12時間と多い事が負担になっているかもしれません。基礎課程最終学期4学期目にハイデルベルク大学の日本学部の学生とともに進級試験を受けます。ハイデルベルク大学日本学部主専攻の学生は、基礎課程で歴史は原始から現代まで、文化史（文学史）を必修とし、マンハイム大の副専攻の学生の場合、歴史は明治維新から現代史が必修で、文学史は受けなくても良く、その代わり、ハイデルベルク大学日本学部副主任のザイフェルト教授が担当する社会、政治、経済一般知識と語彙の授業に参加します。その学期末試験に合格する事が進級試験受験の前提条件となっています。又、進級試験の語学の試験では、まず二学期間を通して三回行われる漢字書き試験（100字）を受け、最後の試験で最低70%の正確率をもって受験資格を取り、会話、筆記、翻訳等の試験を4学期末に別々に受けます。この場合は主専攻と変わりません。

この試験に受ければ、専門課程では日常会話、及び生教材を用いての授業をハイデルベルク大学で受ける事になります。しかし、経営学との時間的な折り合いがうまく行かない事が多いため、マンハイム大学でも日本経済に関しての資料を中心に用い授業を設けています。

専門課程での日本語教育に関しては試験らしきものがDiplom（卒業試験）の試験までありません。また日本語教育の時間数も週4時間と急激に少なくなりますし、それも義務ではないので、参加は学生個人のモチベーションにまかせられるわけです。特に進級試験後の5、6学期は4学期目に日本学での試験に追われて出来なかった経営学の専門分野に集中しますから、出席率も低くなり、それまでに詰め込んだ日本語能力が目に見え低下します。しかし、6学期以降は多くの学生が、日本に留学したり短期研修したりしますからその間の空白はなんとか埋め合わせられることも確かです。但し留学の場合では留学した多くの学生の意見によると、最初の半年は授業が分らない、付いて行くのが大変だという事です。それで留学期間の半年が終わり、残りの半年でどうやら専門科目の授業にも付いて行かれるようになる頃帰国ということらしいのです。日本での学生生活を一年体験したという意味ではよかったという所謂消極的な留学で終わっている感がしないわけでもありません。

9学期から10学期目ごろに（5年目）Diplomの試験（マスターに相応）を受けます。経営学と日本学では期間的には別々に行われます。日本学では主に読解力が問われ、会話力、聴解力等はこの日本での1年の留学でかなり補充されますし、読解力も普通の専門書がかなり読めるようになっています。ですから、大体は留学から帰国後間もなくDiplomの試験を受ける事によって日本学を問題なく修了させることはできます。しかし、有意義な留学生活への、あるいは応用性のある語学力への準備教育を充実させたいというのがこの合同授業の動機の一つでした。

もう一つの動機は学期中に月一回定期的に行われる教室外の「日本語を話す会」で良く聞かれる日本人留学生の持つ一般的な悩みでした。学生寮で外国人がかたまりやすい、ドイツ人の知り合いが出来ない、大学での授業、講義が難しくて分らない等でした。授業が分らなくて憂鬱になり家に閉じこもりがちの人もいました。外国人と知り合う事も楽しい経験の一つだとは思いますが、やはり、ドイツに来た以上ドイツ人との交際もなくてはならない経験でしょう。授業や機会があれば日本学専攻の学生達にタンデムを勧めてはいますが、付いて行くのさえも大変な学部で、個人的につきあう様子はあまり見られませんでした。

このような利害関係を大小同じくする日独学生たちにコミュニケーションの場を作る事がこの合同授業の切っ掛けでした。すなわち一対一のタンデムではなく多数でのタンデムを授業という形で行う事です。

従って独日合同授業は次の3つの目的をもって始められました。

1. コミュニケーションの場として日本学の教室を日本人の留学生にも出入りできる場にする事。
2. 前記の問題に対しての対策。日本学学生には5、6学期の空白を実践性をもった語学講座で補って、日本に行く場合の準備の一環とすること。また、日本人留学生にはドイツにおける日常生活に一時も早く慣れるのみではなく独日言語文化を比較し討論できる場にする事。独日言語の4技能促進に少しでも役立たせる事など。
3. 独日言語の翻訳で双方の弱点はどこにあるか。誤用問題の把握です。

まず、対象とする参加者は日本学副専攻の5、6学期以上のドイツ人学生と日本人の交換留学生です。日本人の交換留学生は大学3、4年のドイツ語、ドイツ文学の学部生で、ドイツ語能力はドイツ留学のための試験を受けて通った、あるいは推薦された人たちです。ドイツ人の日本能力もそれにある程度匹敵しなければなりません。又、無理のない授業内容にするため、資料はドイツ人には日本の新聞(朝日新聞、日本経済新聞、日本経済産業新聞)、日本人にはドイツの全国新聞と地方新聞(FrankfurterAllgemeine,DieWelt,MannheimerMorgen 等)から各自の選択で記事を読みます。ドイツ人は日本語の記事をドイツ語に日本人はドイツ語の記事を日本語に訳し口頭で発表することにしました。新聞はやはり日常生活にも必要な情報を得るのに欠かせないもの、ドイツ人には日本に行く前に新聞に目を通す事に慣れるための準備、日本人はドイツ滞在期間に少なくとも一週間に一度は新聞に目を通し新しい情報を得るのに適当な資料でした。新聞以外に30分間日本の同日の衛星テレビニュースを使いました。

第1の目的はコミュニケーションですが、一学期目は最初は双方が、控えめであったり、一人当りの発表に時間が長くなり、相互の意見の交換はあまり見られませんでした。テレビで見た事も、日本人にはドイツ語で説明する姿勢がなく、恥ずかしかったのか、本当に出来なかったのか返事が曖昧でした。それで、教師が口を挟み過ぎたのではないかとも思われます。二学期目からはメンバーが多くなり、同じメンバーは慣れてきたのでしょうか。日本人側からは私語が多いという批判もで

るくらいでした。分からないところをお互いに説明しあったり、同国人同士の意見交換等で雰囲気も和らぎ、後半は何人が独日学生共同でその日は昼食を一緒にメンザで食べ、1時間から2時間前には教室に来て、そこで各自が勉強をするという風景を見かけるようになりました。授業の後もし一緒に夕食に行ったり飲みに行ったり、あるいはボーリングに行ったりという事をしていたようです。また、授業中の発表も質問も日本人が、かなり積極的にするようになりました。それに時間に余裕のなかったドイツ人の経営学部の学生達がそのために時間を割くようにもなったのです。これは参加者によって様々で、雰囲気も各学期ごとにかなり変わります。

第2番目の方法論としましては模索中ですが、いかに会話、読解、聴解、筆記技能が全体的に効果的に育成できるかです。会話はお互いが束縛なくどちらかの言語で話し合えるような場が自然にできあがっていました。

読解は各自新聞を家に持ち帰り、ある一つの記事を読み訳します。

聴解は当番の人が自分の訳した記事を母国語で発表しますから、参加者はそれを聞き取らねばなりません。そして、聞き取ったものを何等かの形で筆記して原文の新聞記事に訳し直すのです。ですからドイツ人のドイツ語に訳した記事は日本人が聞いて日本語に訳し直す。日本人が日本語に訳した記事はドイツ人がドイツ語に訳し直すのです。それがどこまで新聞の原文に近い訳ができるかという作業です。その場合、意図とする事は1人で訳すのになるべく問題があったもの、訳しにくいもの、或いはどう訳したらいいのか分からないようなものを選ぶことでした。

毎回発表者が4人から6人、独日双方2人から3人です。また、各自の発表に時間がかからないように発表者は単語リストを作りそれをまず参加者に配りました。これは最初に聞いて分からない言葉を訳す場合にその場で辞書を引ながらの作業では時間がかかってしまったので、最低限の単語リストを用意することにしました。また、訳文は日本人は訳文と単語リストの他原文を他の日本人参加者に渡し、ドイツ人の場合も同じくドイツ人の参加者に原文と訳文を渡します。それで発表者の訳した文を各自検討し話し合います。

テレビの場合はテレビを見てドイツ人に分らなかったところを日本人がドイツ語で説明すること、或いは、ドイツ人で分かった人がドイツ語で説明する、という作業でした。その後で再度見ました。これはドイツ人に日本人の生の声に慣れるための聴解の練習と日本人には日本で起きている事項を定期的を知る機会とそれをドイツ語で説明する練習を考慮に入れました。

この方法論が上記の4技能に実際効果的であったかどうか、まだ、結果を出すのには限られた判断しか出来せません。私の準備時間不足と、試みと言う事もあり、参加者の意見を配慮したため、一つの方法論に徹底させなかったこともありました。しかし、これからも継続させるための参考として参加者からアンケートを取りましたので、それらを踏まえながら、まとめてみました。

1. 読解：新聞に慣れるための作業として独日双方の学生に練習になったという意見がほとんどでした。具体的には定期的に新聞を読む事が出来た（日本人）、または、その時のトピックスの見出しに目を通し、よく繰返される言葉、単語が分かったり定着しやすくなる（ドイツ人の学生）、等の意見がありました。

ドイツ人の学生の間では政治経済が興味の対象で、一時は、アフガニスタンに関する事件などのテーマに片寄る傾向があったので、日本人の間ではバランスを取るため、意識してドイツ人の選ばないものどちらかといえば社会、文化に関する記事を選んだようです。もちろんドイツ人の場合でも5学期生の場合は学力程度に応じた軽いテーマの記事を選択したと思われますし、専攻の違いでテーマの選び方も異なったかもしれません。しかし、これには時間的な制約があり、1人で時間を取ると悪い等と他の人への遠慮も念頭にあったため、とかく短い文章が取り上げられるようになりました。また聞いたものを即時訳す作業ですので、考えながら読むべき長文は取り扱いにくかったとも考えられます。それで上級生にとっては新聞記事だけは物足りない、もっと文章としても格調の高いものを読んでもどの程度ドイツ人の学生が理解できるか、また日本人の学生がそれを説明できるか等の検討を求める人もいました。確かに、新聞記事だけでは文章の形が片寄るかもしれません。

2、聴解：日本人の場合はドイツ語を聞いて速記し、即座に訳語を探し訳す作業の練習になった。また、日本の新聞記事を生きたドイツ語に訳され聞く事が出来たという意見がありました。辞書にはない単語の意味をドイツ人からあるいは日本人から説明してもらえるとという利点も上げられます。ドイツ人の場合は新聞記事を口頭で聞き理解するのに、同音異義の言葉の誤用が多かったように思われます。しかし、2回ぐらいの繰り返しを通し正確な翻訳をかなり即座にすることができるようになったとも思われます。訳し方のテクニックをある1人のドイツ人に聞いたところによると、日本語を聞き、まず文の全体の意味をおおまかに掴み、2回目に（いつ、どこでどのくらい等というような）詳細を埋め合わせるのだとのこと。文法要項を考えながらの分析的な読解とは違う練習だったようです。

聴解の場合は特にテレビニュースを聞く練習を考えました。ドイツ人の学生はニュースによっては分るものもあったと思いますが、授業の時間帯が遅かったという事と、希望する話題等を募ったりで30分があまり理解できずに終わってしまった感が残ります。初めの一学期ではニュースを教師が選び、一応説明しながら、再度見るという事をしましたので、ある程度は理解されたと思います。が、この方法を徹底させませんでした。なるべく各方面のニュースを見てほしかった事もありましたし、学生の希望の話題がはっきり分りませんでした。一方、日本人の学生からもドイツ語のテレビ番組も組み入れてほしいという希望が出ています。相方を比較しながら見て、違いを検討するのも一案かもしれません。

3、翻訳：誤用問題ですが、残念ながら組織的にデータを取り整理する余裕がございませんでした。これはこれからの課題に残したいと思っています。但し、前にも申し上げましたように短文の場合は本文に近い訳ができますが、長文が問題です。特に日本語の新聞記事には長文の記事が多いので、ドイツ人の学生達はそれを短く切って訳していました。その場合文の構造を理解したかどうかが問題になります。長文の場合は独日双方の文で修飾文の問題が起こります。訳もさながら、口頭になりますとその関係がはっきりしなくなり間違えることが往々にしてありました。このような誤用は相手に訳してもらおう事によって自ら気が付く事も多かったということです。又単語の意味が分かっているだけでも、また辞書からそのままの訳語では分かりにくい、時には全く訳し間違える事も頻繁にありました。これは一面の意味でしか学習していなかった学生達の持つ問題でしょう。

## まとめ

今回試験的に設けられた独日共同授業では初め専攻等がそれぞれ異なるため接点が一見ないように思われた学生達の間で新聞記事を訳して相手に聞いてもらうということがコミュニケーションの切っ掛けになり得たのではないかと思います。つまり、興味の対象を異にする学生達が、授業で一般的な資料をもって問題意識の共通性を認識し、お互いの関心事項を教室外で会話発展させるのにいい機会ではなかったでしょうか。

授業内容にも自主性を尊重しました。しかし、授業として学生達は目に見える言語能力の成果も求めていたようです。自ら調べたものに関して、後に残ったものもあるかもしれませんが、その場限りで終わってしまった印象も強いのです。その意味では言語教育の場としての目的を再度はっきりさせ、言語技能の定着度を計るシラバスを組むべきだと思われます。口頭での討論もどの程度理解されていたか、各自担当の記事での問題は他の参加者にどの程度正確に伝わったか、教師の見地からも口頭で行われる問題点が十分解決されたか、又それが参加者全員に明らかにされたかについては疑問が残ります。これらを見極めるためには適切な、より丁寧な指導が行われなければならないでしょう。

具体的には問題点の部分を黒板に書き話し合う、訂正された翻訳文を再度清書し、最終的には参加者全員に手渡すこと等を三学期目から実施しました。一人に時間がかなりかかりましたが、お互いが理解し、そのつど問題が解決出来るようにならなければなりません。

定着度を計るためには定期的な単語テストや、努力に応じた結果をいかに採点するか、学生間での採点方法も考えてみたいと思っています。

自主的に学習しようという意欲をもった学生達にはタンデム方式の合同授業は語学力のみでなく、異文化間の意見交換などによるコミュニケーションの場を提供する格好の場ではないでしょうか。これからも学生達の要望に応えられるよう今後のシラバスを考慮していきたいと思っている次第です。